



Title	A・グラムシにおける規律と「ヘゲモニー」
Author(s)	金山, 準; Kaneyama, Jun
Description	特集: 知と政治 = Knowledge and Politics
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 9, 25-44
Issue Date	2009-09-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/39343">https://hdl.handle.net/2115/39343</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCTS9_003.pdf



## A・グラムシにおける 規律と「ヘゲモニー」

金山 準

### Discipline and “Hegemony” in the Thoughts of Antonio Gramsci

KANEYAMA Jun

abstract

The aim of this article is to reconsider the relation between *bios* (the cultural and social life) and *zoe* (the biological life), dealing with the political thoughts of Antonio Gramsci. As is well known, his major interest is the cultural power ruling in the civil society. The notion of “hegemony” has had a great influence over the social sciences of the 20<sup>th</sup> century. But he also devotes a large part of the *Prison Notebooks* to researching the changes of the biological life in the industrial society (drinking, sexual instinct, etc.). I will reexamine the relation between these two major regions of his thoughts as a form of “individualization”.

## 0 | 序論：「ビオス」と「ゾーエー」

コミュニケーションやメディアという主題は、20世紀後半以降の政治学とその周辺領域においていくぶん両義的な位置を占めている。一方では、東欧革命に触発された「市民社会」論や諸々の民主主義論などに見られるように、理性的コミュニケーションに依拠した批判的・自律的公共圏の理論化の試みは今なお活性化している。また別の文脈においても、法権力や経済権力のごとき古典的権力観とは異なる、文化やメディアの次元における権力作用への視点は、20世紀後半より盛んに論じられた主題であった。20世紀におけるマスメディアの発展を背景にした文化的権力という視点は、従来は政治的と考えられてこなかった諸領域に関する批判的検討の余地を圧倒的に拡大したのであり、かかる権力概念の拡張は、20世紀政治学の重要な達成である。このようにコミュニケーションやメディアという問題は、現代の政治学において揺るぎのない地位を得たといつてよい。

だが他方で、20世紀末以来の顕著な一傾向は、文化やコミュニケーションなどの非物質的領域よりも、むしろまったく即物的・動物的な生の領域に対する関心の回帰である。その代表的な例はフーコーらの「生権力 *biopouvoir*」論であろう。「生権力」の一形態としての「管理」・「統治」は、物質的環境を整備することによって人間の生を直接的に制御する。そのような「権力の物理学」が対象とするのは言語的存在としての人間ではなく、自然的プロセスとしての「人口」である。あるいは「生権力」のもう一つの形態である規律的権力が対象とするのは、「機械としての身体」である。これらはいずれも、言語的存在としての人間が行使する権力ではなく、人間がそのようなものとして作り上げられる「個人化」のプロセスにこそ焦点を当てている。そしてフーコーに限らず、環境・セキュリティ・リスク・貧困・生命技術など、この数十年に社会科学上において前景化した語彙の多くは、自然的循環や生物学的生命に深くかかわっている。

かかる二潮流の並存は何を意味しているだろうか。これらの視点はそれぞれ、「ビオス *bios*」と「ゾーエー *zoe*」という人間生活の二側面に対応するものとして一応は整理することができる。H・アレントの有名な区分に従えば、古代ギリシアの言語世界において、「ゾーエー」とは「永遠に自然の循環運動を維持するもの」としての「単なる生命」あるいは「生物学的生命」である。それに対して「特殊に人間的な生命」としての「ビオス」は「活動と言論」、「物語」と「出来事」によって特徴づけられる (Arendt [1958=1994: 152-153])。アレントが、このような言語的生としてのビオスを政治的「活動」の領域 (公共圏) と捉えた上で、それを人間が人間として生きるために不可欠の契機として重視したことはよく知られている。しかも彼女にとって、「ゾーエー」としての生が公共圏に介入することは政治の衰退にほかならない。

アレントのあまりに純粹化された政治観に対しては、これまで繰り返し批判がなされてきた。たとえばフーコーは、自らの「生権力」論を説明するに当たって以下のように述べている。

人間は数千年のあいだ、アリストテレスにとってそうであったものそのままだった。すなわち、生きた動物であり、しかも政治的存在であり得る動物である。〔それに対して〕近代の人間とは、生ける存在としての自らの生そのものが政治において問題となるような、そういう動物なのである (Foucault [1976 : 188=1986 : 181])。

すなわち近代とは、むしろ即物的・動物的な生こそが政治の主対象となる時代であった。アレント自身もまた、労働のごとく自然的循環と密接に関わる領域の優勢化が近代社会の根本的特徴であることを明確に認めている。「近代の共同体はすべて、たちまちのうちに、生命を維持するのに必要な唯一の活動力である労働を中心とするようになったのである」(Arendt [1958=1994 : 71])。そのような時代に、生の問題を回避して政治を問うことはどこまで可能だろうか。アレントに大きな影響を受けた論者としてハーバーマスが挙げられるが、彼についてある論者が述べるように、「一方で工場労働の現実をそのままにしておきながら、他方で強制のない自由なコミュニケーションを実現するということは、果たして可能であろうか」(杉田 [1998 : 41]) という疑問が呈されるのはたしかに自然である。

だが他方で、このような批判にもかかわらず、アレントらの「公共圏」に関する議論が政治学に与えた大きな寄与はむしろ否定しがたい。だとすれば問題は、文化と生あるいは「ビオス」と「ゾーエー」のいずれがより有効な視点かということではないだろう。むしろ現在求められるのは、二つの領域の重要性を認めた上で、両領域の関係を問い直すことであるはずだ。それは言い換えれば、生にかかわる近年の様々な問題提起をふまえることによって、公共性やコミュニケーションというテーマに関するいかなる貢献が可能か、という問題でもある<sup>1)</sup>。

以上の問題意識に基づき、本稿は、アレントが自然の循環作用の一環として検討の埒外に置いた労働の問題を主眼に据える。なぜなら、上述のごとく労働が近代社会を規定する主要な一契機であっただけでなく、それはビオスとゾーエーとを繋ぐ重要なインターフェイスでもあると思われるからである。とりわけここでは、20世紀初頭イタリアの政治思想家A・グラムシ (Antonio Gramsci: 1891-1937) の思想を題材とする。彼の思想は、以上の文脈を背景に置いた際にきわめて興味深い意義をもっている。

グラムシはイタリア共産党の創始者にして、20世紀西欧を代表する政治思想家の一人であるが、彼の思想はマルクス主義の枠内にとどまらず、20世紀の社会科学に広範な影響を与えている。たとえば彼が、法権力や経済権力による「支配」とは異なる、「指導」や「同意」として行使される権力形態を分析するために彫琢したのが、有名な「ヘゲモニー」の概念であった。この概念は、典型的にはカルチュラル・スタディーズなどに見られるよう

▶1 たとえば「社会的なもの」の勃興はアレントにとっては公的領域の失墜にほかならなかったのであるが、今日では「社会的なもの」への問いは、労働・衛生・生殖などの具体的な生活環境の領域を公共性へと接続するものとして捉え返されている。市野川 [2006]、田中 [2006]等を参照。あるいはまた、現代イタリアの思想家G・アガンベンの仕事は、まさにビオスとゾーエーという両領域の関係をめぐってなされている (Agamben [2003])。

に、20世紀後半に隆盛した文化的権力の分析に多大な影響を及ぼした<sup>2</sup>。その意味で彼は、文化やコミュニケーションという主題に関する20世紀の代表的政治思想家の一人といってよい。

他方で彼のもう一つの主要な関心は、「エコポリティクス」（上村忠男）と言われるように、テイラー・システムやフォーディズムなどの同時代に出現した労働形態を視野に置いた、生のありよう全体にかかわる変容にあった。たとえば彼のきわめて重要な草稿「アメリカニズムとフォーディズム」においては、性本能・出生率・飲酒など、まさに生の諸側面が、労働形態の変容と関連して考察されている。このように、即物的・動物的な生への関心は彼の思想全体にとって明らかに大きな要素であるのだが、上のように文化やメディアに向けられたグラムシの関心を受け継ぐ現代の論者が、彼のもう一つの関心である生の領域を問いに含めることはあまりない。またグラムシを主題とした研究においても、この二つの問題領域それぞれについては蓄積があるものの、その相互の関係は十分に論じられているわけではない<sup>3</sup>。つまり文化と生という両テーマの関係は、狭義のグラムシ研究においても未だ解決されていない課題である。

したがって本稿は、この両領域の関係についてのグラムシの論理の再検討と再構成を目的とする。彼が文化と生という二つの領域を無関係に論じていたわけではなく、むしろきわめて密接な関係のもとに捉えていたことは、上述の草稿中に見られる「ヘゲモニーは工場から生まれる」という著名な言にも示されているだろう。なお以上の関心にもとづく本稿は、マルクス主義者たる彼の政治的立場それ自体の評価を目的とするものではないし、「ヘゲモニー」や「市民社会」概念それ自体の、分析概念としての現代的有効性等を直接に扱うものでもない。問題は、20世紀を代表する一政治思想家における、文化と生、ビオスとゾーエーという二領域に関する論理のあり方である。

▶2 カルチュラル・スタディーズの重要な起源としてのグラムシについては、たとえば、参照、Mitchell [2000: 51-53]。

▶3 たとえば、70年代に『獄中ノート』ノート22のフォーディズム論の重要性が改めて指摘されるに至ったことはグラムシ研究にとって重要な成果であったが、とくにこれ以降、工場評議会運動から『獄中ノート』のフォーディズム論を貫く生産力主義的志向を強調するタイプの評価と、「ヘゲモニー」などのグラムシの理論的成果を積極的に強調するタイプのそれとの分裂が顕著なものとなった。この両傾向は現在に至るまで相容れない状態にある。

## 1 「文化の政治」

ごく一般的な把握に従えばグラムシの思想史的な意義とは、マルクス主義の枠内において、イデオロギーや文化など、「上部構造」に属する問題のもつ積極的意義を論じた思想家というものだろう。実際、「ヘゲモニー」概念や知識人論に代表される彼の思想の一つの特徴は、「文化」や社会意識、イデオロギーに対する深い関心にある。

だがそもそも、彼の述べる「文化」という問題はいかなる内実をもつものであったのか。彼の述べる「文化」については、とくに重要な文脈が二つ指摘できる。

第一には、「文化」という彼の関心は、マルクス主義の文脈のみならず、



▶4 ベラミーがその系譜について具体的に挙げるのは、ラブリオーラ、クローチェ、ジェンティーレ、グラムシ、ポッピオ等である。

近代イタリア社会思想史における「文化の政治」(Bellamy [1987 : 8])<sup>4</sup>、あるいは「国民教育」(Bobbio [1986 = 1993 : 10])の系譜に連なるものである。後者の系譜は以下のような志向を持つ。

諸政党の外部や周辺部にあつて、知識人の責務は、理念を磨きあげ、理論を準備し、精神的革新を果たし、もって妥協、トラスフォルミズモ、選挙や議会の腐敗などによって低下した政治生活の格調を高め、いっそう偉大で開明的な新しいイタリアにふさわしい新しいエリートを形成するということだった。

グラムシは政党の中心にあつた存在ではあるが、このような理念に基づく「精神的革新」としての政治の刷新、そしてそれを担うべきエリートの養成という任務は彼の文章にも繰り返し表れている。

第二に、「文化」とは、当時のマルクス主義周辺の知識人における一つの重要な主題であつた。後述する工場評議会運動期にグラムシらが編んだ雑誌『オルディネ・ヌオーヴォ (新しい秩序)』の副題は「社会主義文化のための週刊誌」であつたが、同誌に掲載された論文において彼は以下のように述べている。

プロレタリア文化運動とは、この表現にロシアではルナチャルスキー同志が、また西欧ではアンリ・バルビュスが付与した革命的な意味においては、新しい文明、新しい習俗、生と思考の新しい習慣、新しい感情の創造を目指すものである (Gramsci [1955 : 493])<sup>5</sup>。

▶5 グラムシの著作には翻訳が多種存在する。本稿での引用について、対応する邦訳が存在する場合は随時それらを参照させていただいたが、煩瑣を避けるため原典の箇所のみを挙げる。

ここに見られるように、「文化」とは、単に精神的側面だけでなく、より身体的あるいは情動的な側面や日常的な慣行・習俗をも含んでいる。そしてこのような文化というテーマは、現在の資本主義社会に抗する対抗文化構築の戦略であると同時に、来るべき社会主義社会を担う新しい人間を創生するという問題意識と密接に結びついてなされていた<sup>6</sup>。このような「新しい人間」というモチーフは、同時代の文学や芸術におけるアヴァンギャルド運動も共有したものであつたが、とりわけグラムシらの政治思想家にとって、「新しい人間」の創生は新しい社会の建設と表裏一体である。このように、個々人の身体や感情にかかわるミクロの政治から産業社会の再組織化というマクロな次元までをトータルに問う視点はとくに後期のグラムシにおいて展開されるが、その萌芽はすでにここに見ることができるだろう。

▶6 ルナチャルスキーらの運動については、佐藤 [2000] を参照。また Buci-Glucksmann [1975 = 83 : 114-117] においては、バルビュスとグラムシの関係が簡潔に触れられている。

そして、そのようなトータルな変革の核となるべき特異点としてグラムシが想定したものは、後期の思想においては「市民社会」や知識人あるいは政党などであるが、前期の彼にとってもっとも重要であつたのはおそらく工場である。以下本稿では、まず前期の思想を特徴付ける工場評議会運動期のグラムシについて検討し、後半部では『獄中ノート』を中心に、前期の彼が取り上げた問題が、いかに発展した形で問い直されているかを検討する。

## 2 工場評議会運動

第一に検討対象とするのは、1919年から1920年における工場評議会運動期におけるグラムシの思想である。工場評議会運動についてごく簡単に確認すれば、それはトリノの各工場において発展した「内部委員会」を母体とする。工場内部委員会は1904年のゼネストにおいて自然発生的に出現し、やがて06年には公式に承認されるに至った。当初は工場内の労働者によって選出された一種の苦情委員会であり、工場内の規律や仲裁などの問題を扱った。第一次大戦中、生産増強の目的により政府から支持され、階級協調の機関として発展したが、戦後になってアナーキスト、サンディカリスト、非妥協派社会主義者の主張が強まり、直接民主主義と革命路線へと転換する。1919年1月、イタリア金属労働者連盟（FIOM）と自動車工業家団体との間で締結された協定により、内部委員会に対する組合の支配が承認され、内部委員会の候補者はFIOMが指名し、組合員によってのみ選出されることになった。それに続く1919年から20年が、グラムシらの工場評議会運動が展開された時期である。1925年には内部委員会はファシスト政府によって解散させられている。

グラムシらは、上の「内部委員会」を直接民主主義と労働者の自律の機関、革命推進の機関としての工場評議会に改組し、非組合員を含めた全労働者に投票権を与えた（内部委員は工場評議会の執行委員となった）。グラムシの目的は端的に言えば、「内部委員会」をより純粋に労働者だけからなる自律的な機関へと転換させることであった。そこでは工場内の各部門における労働者全員の投票によって職場の代表委員が選出されるが、その選出母体がグラムシらによって工場評議会と称されたのである。それは工場で生産に携わる労働者の全員が参加するという点において、任意加入の労働組合や政党とは性質を異にする<sup>7</sup>。

このような試みに並行してなされたグラムシの論説は、彼らが編集した雑誌『オルディネ・ヌオーヴォ』に見ることができる。具体的内容については以下で検討するが、端的に言えばその基底にあるのは、労働者（とりわけ、生産者としての労働者）の自律の条件としての文化に対する強い関心である。

### 2.1 自律

一般的に、工場評議会運動は「自主管理 autogestion」的社会主義の一形態として捉えられている（Rosanvallon [1976 = 82 : 7]）。それは同時代に進行したロシア革命のインパクトを強く受け、ソヴィエト型の組織をイタリアに実現することを目指したものであった。

この時期のグラムシのスローガンは「工場の全権力を工場委員会に」であったが、それが可能となるためには、自律的に生産管理を行うための技

▶7 工場評議会をめぐる事実関係については、Spriano [1964 = 79 : 15-38]、上村 [2005 : 112-113]などを参照。

量や力量が必要とされる。逆に言えば、労働者が自律的に工場を管理するのであれば、資本主義体制の下で被雇用者として労働する必然性はもはや存在しないと考えられた。

工場評議会は、工業の分野における生産者の自律の形態であり、また共産主義的経済組織の基礎であって、階級に分裂した社会が廃絶され、新たな階級分裂を「物質的に」不可能にする諸条件を創出する点で、資本主義体制にとって致命的な闘争手段である（Gramsci [1955 : 139]）。

ここに見られるように、すでに共産主義的経済組織として考えられている工場評議会において自律の主体となるのは、もはや「市民」や抽象的個人ではなく、「生産者」あるいは「労働者」である。彼らによって構成される評議会は「共産主義的経済組織」であると同時に、政治的な決定の機関でもある。よってこのような制度を政治的側面から捉えなおすならば、それは単なる民主主義ではなく、生産の現場、とりわけ工場の分業に基礎を置くものとしての「労働者民主主義」である。「革命の過程は生産の過程、つまり工場のなかで生ずる」。

このような意味での労働者の自律は、工場評議会という制度が完成されればただちに達成されるものではない。制度と並んで重要な問題は、自律を可能にする条件としての力量や技量と連帯性、そして「生産者」としてのモラルである。

工場評議会はプロレタリア国家のモデルである。プロレタリア国家の組織に固有のあらゆる問題は、評議会の組織にも固有なものである。いずれにおいても、市民の概念は衰退し、同志の概念がそれに取って代わる。巧みに、そして有効に生産するための協働が連帯を進展させ、愛情と友愛の絆を増大させる。誰もが不可欠であり、誰もが自らの地位につき、誰もが一つの機能と一つの地位を占める。……評議会の存在は、労働者に生産の直接的な責任を与え、彼らが自らの労働を改善するように導き、意識的で自発的な規律を生み出し、生産者の心理、すなわち歴史の創造者の心理を作り出す（Gramsci [1955 : 37-38]）。

このようにして工場評議会を通じて「生産者の心理」が涵養されたとき、彼によれば、労働者が自律的に生産を管理するように導くことが可能となる。そしてそれがもし可能であるとすれば、それはもはや、マルクスが述べたように、協働の統一性をもつ力能を資本にゆだねる必要はないということになろう。その意味で、工場評議会はそれ自身が「プロレタリア国家のモデル」であり、未来社会の萌芽である。

かかる工場評議会のグラムシにとっての新しさは、それが標榜する「労働者民主主義」が、産業の技術的要請にしたがって生まれたヒエラルキー的分業に基礎を置く点である。そのようなものとして評議会は生産と政治とを統合し、労働者の力量と生産者としての習俗とを涵養することによつ



て、未来の「プロレタリア国家のモデル」となる。そのような企図は、抽象的個人の任意加盟にもとづく政党には不可能であると考えられた。

ここでグラムシが、「市民」ではなく「生産者」によって、政党ではなく工場評議会を通じて、工場内分業の有機的秩序を基盤として民主主義を構想していることは、彼の後の思想的発展を考える上できわめて重要である。すなわちそこで「生産者」としての個々人に求められる知や習俗とは、有機体的秩序を前提として、その分枝としての生産機能をよりよく果たすと同時に、あくまでその機能を担う者としての資格において政治参与を果たすことであった。政治への参与を果たす資格は、有機的秩序の一分枝を担う「生産者」としてであって、「市民」のごとき抽象的個人ではない。グラムシは、以上の「労働者民主主義」によって政治と経済が不可分のものになると同時に、労働者全体としての自律が達成されると考えたのであった。かかる構想は、同時代におけるE・デュルケムの産業社会論や英国のギルド社会主義、あるいは後のコーポラティズム的発想とも明らかに親近性をもつと思われるが<sup>8</sup>、『獄中ノート』等に見られる後期の彼の思想にとっても基調的な志向となる。

## 2.2 規律化

この時期のグラムシにとって、ロシア革命と並んで重要な背景となるのが第一次大戦である。第一次大戦は、グラムシにとってとりもなおさず「マルクスが資本主義世界の破局という表現で総合した」現代史の発展過程を証明するものであった。そしてこの「野蛮と経済的破滅との深淵」から人間社会を救出できるのは、彼によれば「勤労者階級」のみである。しかもそれは、「自らを支配階級に組織し、政治—産業の領域において自らの独裁を強制することによって」なされる（Gramsci [1955 : 27]）。ではそれはいかにして可能となるか。

ここで戦争のもった意味とは、より具体的には、資本主義の自由競争的な特性が失われ、独占集中が進むと同時に、社会への国家の介入が増大したことである。

戦争は階級闘争の戦略的状况を一変させた。資本家は優位を失い、彼らの自由は制限され、彼らの権力は消え失せた。資本主義の集中は可能な限り最高度の発展に達し、生産と交易の世界大の独占を実現した（Gramsci [1955 : 17]）。

戦争の間、戦争のもたらす必然性によって、イタリア国家は、生産の規制と物財の規制を自らの機能とした。産業と商業のトラストの一形態、すなわち生産と交換手段の集中の一形態が実現され、プロレタリア大衆と準プロレタリア大衆の搾取の諸条件が平等にされた。これらの諸条件が、彼らの革命的行動をもたらししたのである（Gramsci [1955 : 22]）。

グラムシによれば、以上の過程の結果としてもたらされた「勤労者大衆の

▶8 たとえばデュルケムにおける産業社会の再組織化の企図とは、「職業団体」を単位とした産業の再編成であった。そこでは個人は職能を同じくする者たちからなる「職業団体」へと統合される。そこで身につけられる「職業道徳」が現代における社会連帯の基盤となり、現代の「病」たる「アノミー」状態が克服されるという（Durkheim [1897=1985]）。

集中は、革命的プロレタリア階級に未曾有の力を与えている」。ここでグラムシが見ているのは、独占資本主義の発展にともなう労働者大衆の状況の一元化と、彼らの集中化である。かかる状況は、「ブルジョワ的習俗、また自由競争と階級闘争から生じた資本主義的無秩序にとって代わるべき」「新しいプロレタリア的習俗の諸条件と新しい共産主義的秩序の諸条件」を生み出している（Gramsci [1955 : 14]）。

すなわち以上の過程を通じて進行したのは、もはや資本家ではなく国家主導によって達成された産業の組織化であり、それに伴う労働者の組織化である。その条件を作り出したことが第一次大戦の最大の意義であった。

このような組織化の進展が軍隊的規律と類比的に語られることは、マルクス主義の系譜において常套的な論法である。マルクス・エンゲルス『共産党宣言』によれば、

ブルジョワジー、すなわち資本が発展するにつれて、プロレタリアート、すなわち近代的労働者階級も発展する……近代的工業は、家父長制的な親方の小さな仕事を、産業資本家の大工場に変えた。工場の中につめこまれる労働者群は、兵隊のように組織される（Marx, Engels [1932 = 1971 : 48-49]）。

工場と軍隊の比喩は、グラムシにおいてもきわめて頻繁に援用される。たとえば彼は、前述したような工場内部委員会を単位とする「労働者民主主義」のモデルを構想する際に、つぎのように述べる。

このような労働者民主主義の制度は（農民の同様な組織と統合されることによって）大衆に恒常的な形態と規律を与え、政治と管理の経験を受ける偉大な学校となるだろう……それぞれの工場がこの軍隊の一個あるいは数個の連隊となるだろう。（Gramsci [1955 : 12]）

実際に工場においては、「工場の習俗」が「労働に関する真の実質的な法制化の最初の萌芽、すなわち、生産者が作成し、自分自身に与える法律の最初の萌芽として」形成される。それと同時に技能や知識の発展も実現される。「工場それ自体のなかに、あらゆる労働者が、人を獣にする疲れから回復し、生産過程に関する知識に触れ、自らを高めることのできる、適切な教育部門、真の職業学校を創り出せないはずがあるか」（Gramsci [1955 : 33-34]）。これらすべての基礎となるのは、規律の存在である。

未来社会の単位としての工場は、軍隊にも類比される組織形態をもつ。マルクスは変革主体の形成において工場的・軍隊的規律に着目したが、グラムシは同様の発展を、マルクスとは異なる帝国主義という段階の資本主義において見て取っている。しかも彼は、まさに工場そのものを未来社会の母体と考えた点で、マルクスよりもさらに一步踏み込んでいるといえるだろう。

工場評議会運動期のグラムシの政治構想については、おおむね以上のよ

うにまとめることができる。ここで顕著なのは規律化に対する強い肯定的評価であり、それに結びついた産業主義的思考である。実際にも、工場評議会運動のもったこのような特徴は、グラムシの「生産力主義」的態度をとくに重視するタイプの研究潮流において重視されている<sup>9</sup>。それでは、彼のそのような特徴について本稿の関心からはいかなる含意を認めるべきだろうか。工場評議会運動とは、協働の様式を自律的に組み換える試み、そしてそのための文化的条件を作り出す試みであった。それは、熟練労働者の世界においては個々人の能力や人格依存的な関係に依拠するかたちで形成されていた協業の文化的条件を、社会的関係のなかで、集団としての労働者による自主管理として取り戻す試み（中岡 [1971: 270]）の一形態であったと見ることができる。

したがって、上に見てきた「規律」や「組織化」への肯定的評価も、資本主義によってはもはや統御しえないと見えた生産を統制しうるほどの技能や力量を労働者が身につけることが可能であり、またそうすべきであるという視点のもとになされている。そうであればこそ、工場評議会が新たな社会秩序のひな形たりうるのである。この時期のグラムシはレーニン『国家と革命』に親しんでいたといわれるが、生産力の発展がその管理を容易にするのではなく、むしろ高度な知的・技能的力量を要求するという認識において、グラムシはレーニンと袂を分かたつ。

このような規律化の進展への肯定的評価は、むしろ現在のわれわれにとっては理解しがたい部分を含む。それに関連して、たとえば上村忠男は、工場評議会運動の基本モチーフを「〈組織された生産者社会〉の夢」と規定している。それは高度に20世紀的な思想であり、全体主義とも共通する側面をもつという（上村 [2005: 107-146]）。ただしこの指摘が正当であるにせよ、それをとりたててグラムシだけの問題とすることはできないだろう。むしろS・ウォーリンも指摘するように、「事物を支配する力としての組織」というモチーフ自体は、19世紀以来の社会思想的問題であったというべきである<sup>10</sup>（Wolin [1961: 378-379 = 1975-1983: 436-438]）。

だとすれば重要なのは、そのように広く共有された「夢」が、「ヘゲモニー」などに代表されるグラムシの理論的な独創性とどのように関わっているのか、言い換えれば、上のような労働の規律や「組織化」への志向が、彼の思想的営為にとってどれほど本質的であったのかを問うことであると思われる。この点が次節の問題となる。

▶9 その代表的なものとして、Trentin [1997] など。

▶10 なお19世紀の例としてウォーリンはとくにサン＝シモンを挙げている。

### 3 『獄中ノート』

本節の検討対象は『獄中ノート』期のグラムシである。『獄中ノート』の議論の特徴は、第一には、政党への積極的評価に見られるように、工場評

議会期のそれからの政治的な態度変化である。そして第二に、「ヘゲモニー」や「陣地戦」・「機動戦」、「受動的革命」など、彼の思想を有名なものとした諸概念の明確化という点が重要である。そして、本稿がとくに注目するのは、これまで見てきたような工場評議会の実践と結びついた様々の問いが、より根源的な人間論や歴史論の次元から捉え返されている点である。それは、投獄によって強制的に政治活動から遮断されたことによる、意図せざる副産物であった。また自らの工場評議会運動の失敗や、他のヨーロッパ諸国における革命の挫折を目の当たりにすることによって、論述の重点は直ちにおこなわれるべき革命的実践への戦略論というよりは、資本主義社会についての分析へと移っている。したがってそれらは、これまで見てきたような政治戦略に関わる彼の主要なテーマが、より深い人間観や社会観とどのように関わっていたのかを考える上で重要な素材となっている。また他方で、工場評議会期からの様々な政治的立場の変容にもかかわらず、「生産力主義」とも言われる生産の合理化への強い関心はここでも貫かれている (Trentin [1997 : 156-157])。

以下ではこれまでのテーマとの関係に留意しつつ検討を進める。まず、「諸関係の総合」としての彼の人間観を手がかりにグラムシの思考の特徴を浮き彫りにし、その後、彼の有名な「ヘゲモニー」概念の検討にいたる。

### 3.1 「諸関係の総合」としての人間

グラムシはしばしば、歴史の進展における人間の主体性や意志性の重要性を語っている。この点はたしかに、第二インターの「正統派」やマルクス＝レーニン主義の歴史決定論に対して、「西欧マルクス主義」の祖たる彼の特徴を表しているといえる。そこにはもちろん、同じく「正統派」的な決定論を批判した社会主義思想家A・ラブリオーラやG・ソレルからの影響を見て取ることもできる。ただし、そのような主体性や自発性の位置づけは、ラブリオーラやソレルにおいてもそうであったように、グラムシにおいてもさほど単純なものではない。そもそもグラムシにとって、人間の主体性は無条件に前提とされるものではない。むしろ彼の関心は、そのような主体性がいかにして生産されるか、そのプロセスにこそあるように思われる。ここで第一に問題となるのが、個々人の主体性の条件としての「歴史的ブロック」である。彼によれば個人とは、その「ブロック」内部における「諸関係の総合」として表現される。

グラムシによれば、社会主義が実現する以前の社会においては、人々はみな、不調和で矛盾した構造と文化の体系において生を営んでいる。それが、構造と上部構造との統一的な過程として形成する「歴史的ブロック」である。「歴史的ブロック」とは、その第一の側面においては、「上部構造の複雑で不調和な総体は生産の社会的諸関係の総体の反映である」という関係である (Gramsci [1977 : 1051])。このように「歴史的ブロック」内で上部構造が構造を反映する一方で、両者の関係は「構造と上部構造との間の必然的な相互関係、すなわち現実的な弁証法的過程であるところの相互の関係」とも称される (Gramsci [1977 : 1052])。そのかぎり、この



概念についてはむしろ上部構造からする構造への反作用の可能性が強く強調されているといえるだろう（上村 [2008：401]）。あるいはまた、「上部構造と構造との間には人体における皮膚と骸骨の間の結合にも似たひとつの必然的で根本的な結合」が存在するとも言われている（Gramsci [1977：437]）。

このようにグラムシにとって、上部構造は下部構造に密接に関連しつつも相対的に自律するのだが、より重要なのは以下の点である。すなわち彼は、上部構造の内部における、物的な支配や強制に対する「指導」や「同意」あるいは「教育」の優位を強調している。以下で述べるように、イデオロギーや「ヘゲモニー」はまさにこの領域において、様々な媒介を通じて同意を積極的に調達するものとして作用するのである。

このように上部構造の意義が強調される以上、「歴史的ブロック」の中でおこなわれる闘争もまた、単なる経済闘争や物的な力の闘争に還元できるものではない。すなわち「歴史的ブロック」とは、様々な社会集団の争いによって形成されると同時に、それらの集団が奉じる様々な世界観のせめぎ合いによっても形成される、矛盾をはらんだ統一体である。その中で、人はそれらの影響につねに曝されつつ生きるのである。かかる意味において個人は「現存する諸関係の総合」である。しかもその諸関係は歴史的に形成されたものである以上、個人はこの諸関係の歴史の「総合」、すなわち「過去全体の要約」でもある（Gramsci [1977：1346]）。したがって超歴史的な人間本性なるものはありえない。人間の性質は、「現存する諸関係」ならびに「諸関係の歴史」とまったく相即の問題なのである。

それでは、かかる「諸関係の総合」としての人間は、どのような形態で個人として形成されるのだろうか。

自らの世界観を通じて、人はつねにある特定の集団に、正確には、おなじ思考と行動の様式を共有するあらゆる社会的な分子からなる集団に所属する。人はなんらかのコンフォーミズムにしたがうコンフォーマリストであり、つねに大衆人 *uomini-massa*、または集合人 *uomini-collettivi* である。問題は、コンフォーミズムや、自分がその一部をなす大衆人が、どのような歴史的タイプのものであるか、という点にある。世界観が批判的で一貫的なものでなく、場あたりのでばらばらのものであるときには、人は同時に複数の大衆人に属しているのであり、彼の人格は奇怪な混合物となる（Gramsci [1977：1376]）。

すなわち、人間は自らの世界観を通じてある集団に所属するという意味で、みな「大衆人」である。その「大衆人」はしばしば多数の集団に同時に所属しているため、彼の思考は多様な勢力の影響を受けて矛盾し一貫性を欠いている。その「奇怪な混合物」を秩序立て、一貫したものにすることこそがグラムシの執拗な主張である。彼によれば、思考が秩序だった統一されたものになってこそ、人間の創造性や批判的意識の発展が可能になる。



したがって、自らの世界観を批判するということは、それを統一的で一貫的なものにし、もっとも進んだ世界的思考が到達した点にまで高めるということを意味している。それはまた、これまでに存在してきたあらゆる哲学を、それが人民の哲学のなかに強固な地層を残しているかぎりにおいて、批判するということを意味している（Gramsci [1977 : 1376]）。

ただし個人は、このように一貫的な思想を孤独な思索によって手に入れるわけではない。そもそも人間が「諸関係の総合」である以上、自己の変革はそれ自体が社会変革でもあらざるを得ない。

各人が自分自身を変化させるのは、各人がその結び目の中心をなしている諸関係の総体を変化させる程度に応じてである、ということができる。この意味で、真の哲学者は政治家であるし、そうでしかありえない（Gramsci [1977 : 1345]）。

すなわち、「哲学」は「政治」と等しい。これをやや別の視点から言い換えれば、労働のごとき自然との循環作用も、歴史的に形成された文化と知の要素を必然的に含まざるをえないということである。したがって、原理的に「すべての人は知識人である」。この点は重要である。人間の「生」全体を包括的に文化的・歴史的形物と見なすことによって、労働や生産の領域と「市民社会」の政治とをつなぐ視点が形成されるからである。もちろんこのような視点は、「社会主義文化」を論じた彼の初期の関心にも萌芽的に表れているだろう。

だがここで重要なことは、そのような「哲学」としての「政治」において特に重視される契機は、個人というよりも集団であった点である。

あらゆる歴史的行動は「集合的人間uomo collettivo」によってのみ達成されうる。すなわちそれは、異質な目的をもったばらばらな多数の意志が、一つの（同一の）共通な世界観に基づき、同じ目的にむかって一つに接合されるような「文化的・社会的」統一の達成を前提とする（……）（Gramsci [1977 : 1331]）。

すなわち、歴史的な「諸関係の総合」としての人間の発展は、個々人がある社会集団の中に有機的・統一的に組み込まれることによってこそ可能となる。

したがって、ある社会集団が社会内の抗争において勢力を拡大すること、その社会集団の中へと個々人が有機的に組み込まれること（規律化）、その中の個々人が一貫的で秩序だった思考を可能にすること、この三つはグラムシにおいてまったく並行的な過程である<sup>11</sup>。このように、有機的秩序を前提とした上で、その中での一分枝としての機能をよりよく自覚し遂行することによってこそ個々人の知が発展するという発想は、工場評議会運動

▶11 その意味で、彼が述べる「批判的」意識とは、個人の自律というよりも、ある社会集団が他の社会集団に対してもつ自律として考えられているように思われる。そこでは、集団に対する個人の自律や批判的意識という視点はやや希薄である。

期から一貫するグラムシの志向である。グラムシにとって現在あるべき知識人のモデルとは、社会から超越した「伝統的知識人」ではなく、産業社会が要請する専門的機能によって特徴づけられる「有機的知識人」であった。このような認識もまた、以上の問題と深く関係するだろう。

### 3.2 「ヘゲモニー」

「歴史的ブロック」の内部における集団と個人の意識と意志をそのように組織化するためには、現代のイタリアないし西欧諸国においてはさまざまな契機が必要となる。グラムシの『獄中ノート』のかなりの部分は、そのための叙述に割かれている。それがたとえば彼の知識人論や政党論、そしてもちろん「ヘゲモニー」論などに結実している。

彼の政党論や知識人論などについて本稿では詳述しないが、生産と直接かかわらないこれらの契機を肯定的に評価する傾向は、前期グラムシからの明らかな変化である。そしてそのような変化は工場評議会運動の失敗によるものであるが、その失敗は彼に対して、生産の領域と有機的に関係しつつも相対的に自律するものとしての上部構造への関心を決定的なかたちで浮上させた。とりわけそこで問題になるのが「市民社会 *società civile*」の概念である。そこでは文化や知、あるいはモラルの問題は、生産の場におおむね限定されていた前期グラムシよりもはるかに広い範囲において問い直されることになる。

「市民社会」の概念は、ヘーゲルの図式を受け継いだマルクス主義においては「ブルジョア社会」とおおむね同一視されてきたが、周知のとおりグラムシにおいては「市民社会」は文化やモラルにかかわる領域であり、ヘーゲルにおける「人倫」の圏に近い。このような領域において問題となるのが、いうまでもなく「ヘゲモニー」の概念である。彼自身の言によれば、彼は「市民社会」概念を「ある社会集団の、社会全体に対する政治的文化的ヘゲモニー（国家の倫理的実質として）の意味」で用いているという（Gramsci [1977: 703]）。

グラムシのヘゲモニー概念については、ごく一般的には、モラルや意志の次元での力や、支配と異なる「同意」・「指導」に重点を置くことで、レーニンにおいては階級同盟における労働者の優越性を指すに過ぎなかったこの概念を根本的に作り替えたものとされている（Charzat [1977: 185-195]）。

このような彼の「ヘゲモニー」概念が形成された文脈についてはきわめて多くの研究がすでになされているが、本稿の関心上そのもっとも重要な部分に限れば、「ヘゲモニー」論の最大の関心は、南部農民層らの巨大な「従属（サブアルタン） *subalterni* 集団」への訴えかけにあった<sup>12</sup>。すなわちここでは、南部農民層らの「従属集団」を主体とする対抗的公共圏の形成の可能性が、「ヘゲモニー」概念によって分析対象となっているのである。

このような関心を背景とする「ヘゲモニー」概念を抽象的に規定すれば、それは「内的矛盾のない、新しい同質的な政治経済的な歴史的ブロックの実現」（Gramsci [1977: 1612]）を目指す一連の活動の総体を指す。しか

▶12 姜 [1995] は、近代イタリアの宿痾としての南部問題が与えた影響という視点から、グラムシの思想を詳細に検討している。

もそのような同質性は、経済的・政治的利害のみならず、知やモラルなど文化的な面においても達成される必要がある。そのようなヘゲモニー達成へ向けての闘争の主要な場が「市民社会」であり、それは強権的な力による支配の領域としての「政治社会 *società politica*」あるいは狭義の国家に対置される。「市民社会」において、支配集団は学校や教会などの諸組織あるいは知識人を通じて「ヘゲモニー」を維持し、拡大する。ここにはむろん、労働者の生が営まれる場が、生産点（工場）だけでなく、議会・政党・教会・学校・メディアなどの領域に及ぶという認識がある。それらの無数かつ微細な媒介を通じて、「ヘゲモニー」は「歴史的ブロック」の統一性を維持するのである。

それに対して従属的集団は、「市民社会」の場で対抗的ヘゲモニーを組織化することによって、「歴史的ブロック」の組み替えを図る。そこでその手段となるのは、上に挙げられた様々な文化的媒介であるが、とりわけグラムシが重視するのが知識人と政党である。それらが重要視されるのは、端的にはそれらの存在が一般の人民よりも有機的で一貫した（その意味で高度な）文化・思想を有しているがゆえである。

批判的自己意識とは、歴史のおよび政治的には、知識人エリートの創造を意味しているのである。ある人間大衆が自分を「区別」し、「対自的に」独立するには、自らを（広い意味において）組織化しなければならない。しかも知識人、すなわち組織し指導する者がいなければ組織化はありえない（Gramsci [1977 : 1386]）。

以上の過程を通じて対抗ヘゲモニーが自らを貫徹し、矛盾のない社会が形成されることがグラムシにとっての最終的な目的である。またその過程は、従属集団にとっての知や習俗における進歩の過程でもある。ヘゲモニー的闘争の過程は、人民がやがて「一貫的で統一的な世界観」の獲得に至る過程であり、その意味で「偉大な哲学的進歩」である（Gramsci [1977 : 1385]）。

### 3.3 フォーディズム

以上のようなヘゲモニーの組織化は、「市民社会」の領域だけで行われるわけではない。工場評議会運動期と同様に、この過程においては狭義の文化的契機だけでなく、労働のような生の領域もまた、この観点から捉え返されている。彼は、「生まれようとしている新しい世界の参照点は何か。生産の世界、労働である」（Gramsci [1977 : 863]）と述べるが、『獄中ノート』における労働の問題としてもっとも重要な主題はむろんフォーディズムである。フォーディズムは彼にとって単なる新しい労働形態というにとどまらず、文化と生を同時に貫く組織化と規律化のモデルそれ自体となっているように思われる。

グラムシは「新しいタイプの人間」を生み出すべきこの運動について、『獄中ノート』のノート22において集中的に考察している。フォーディズ

ムの前身たるテイラー・システムについては工場評議会期に『オルディネ・ヌオーヴォ』誌上でも議論がなされていた。ただし、この時期の彼の関心がいわば労務管理の次元に限定されていたのに対して、『獄中ノート』においては、飲酒や「性本能」の規制、家族形態の変化など、フォーディズムが生をより広範囲において改変し管理する過程に関心が及んでいる。このように、工場内での労働にとどまらず、資本主義が生全領域を取り込みつつ生産を社会的に組織化する仕方を分析した点で、『獄中ノート』のフォーディズム論の射程は前期のそれよりはるかに拡大しているといえるだろう。

彼はテイラー・システムやフォーディズムを、以下のような産業主義の延長線上にあるものとして捉えている。

産業主義の歴史は、つねに、人間の「獣性」の要素に対する絶え間ない闘争であった（そして、今日、より強化された厳格な形態をとるに至っている）。それは、産業主義の必然的な結果である、集団生活のますます複雑化していく諸形態を可能にするような、秩序、正確さ、精密さという、つねに新しく、より複雑で厳格な規範や習慣に、本能（自然の、つまり動物的・原始的な）を服従させる、不断の、しばしば苦しみに満ちた血なまぐさい過程であった（Gramsci [1977 : 2160]）。

かかる産業主義の20世紀的形態としてのフォーディズムに対する彼の評価はやや両義的であり、単純な否定ないし肯定の判断がそこで下されているわけではない。一方で彼は、この過程がもたらす労働の「非人間性」や「偽善」が資本主義社会の全般的な「危機」をもたらすであろうと指摘している。だがそうではあるにせよ、フォーディズムが目指す「新しいタイプの人間」それ自体については、彼は基本的に肯定していたように思われる<sup>13</sup>。

問題はつぎのようになる。フォードに固有の産業の型、生産と労働の組織の型は「合理的」であるのかどうか、すなわち、それは一般化されるし、またされるべきものであるのか。それとも逆に、労働組合の力や立法によって打倒されるべき病的な現象なのか。すなわち、社会と国家の物質的ならびに道徳的な圧力によって、マスとしての労働者を心身の全面的な改造の過程に耐えぬくようみちびいていき、フォード労働者の平均的な型が近代的労働者の平均的な型になるようにすることは可能であるのか。それとも、そんなことをすれば、肉体的な退化と種の劣化をもたらし、いっさいの労働力を破壊してしまうことになりかねないので、不可能であるのか。以下のように答えることができるように思われる。フォードの方法は「合理的」である、すなわち、一般化されるべきである。だがそのためには、社会状況の変化と個々人の習俗や習慣の変化が生じるだけの長い過程が必要である（Gramsci [1977 : 2173]）。

すなわち、「生」を多方面から改変することによって「筋肉と神経のエネル

▶13 そもそもここで彼が挙げる「危機」もまた、「新しい文明」が登場する際に通過しなければならない過渡期と考えられている。



ギーの特別の消費を要求する生産と労働の新しい方法」を可能にするものとしてのフォーディズムは、「合理的」である。

フォーディズムの前身たるテイラー・システムの企図とは、機械化の進展を背景に、労働者の訓練・規律化を「伝統的方法」から脱却させ、一元化・組織化・体系化された管理への移行にあった。そこでは、熟練技能に含まれている身体的運動は徹底的な分析によって「要素 (elements)」へと単純化される。それによってこそ、効率的で組織的な生産を可能にする諸条件の「標準化 (standardization)」が可能となるのである (島 [1979 : 244-262])。そしてフォーディズムは、テイラー・システムと直接の連関はないにせよ、それら先行する合理化への企図を総合した、「機械工業のアメリカ的展開の集大成」であった (中岡 [1970 : 111])。しかもグラムシにとってフォーディズムは、この種の「標準化」・規格化が労働のみならず生産者の生全般に渡って行使される点で決定的に重要である。

現代世界におけるコンフォーミズムへの傾向には、過去におけるよりもはるかに広くて深いものがある。思考や行動の様式の標準化は、全国的な、さらには全大陸的なひろがりをしめすにいたっている。集合人の経済的土台は、大工場、テイラー・システム化、合理化などである (Gramsci [1977 : 862])。

すなわちグラムシにおいて、個人の統一的な「人格」形成は、分割化され単純化されることで夾雑物を排される身体運動の「合理化」、そしてそれを通じてなされる有機的 (組織的) 分業体制への生の全般的な統合と正確に対応している。工場労働を中心とする生の規格化と規律化 (フォーディズム) こそが、統一的な「人格」としての文化やコミュニケーションの主体、すなわち新たな「ヘゲモニー」を担うべき主体を形成するのである。このような意味での身体と「人格」との組織化、さらにそれと並行的になされる産業社会全体の組織化が、グラムシの根本的な企図であったということができよう。

## 4 | 結論：「個体化」の諸形態

以上、本稿ではフォーディズム的な規律の問題と、「市民社会」・「ヘゲモニー」・「歴史的ブロック」という彼の重要概念について、しばしば見過ごされがちなそれらの相互連関に重点を置いて検討してきた。「ヘゲモニー」などの文化的権力の面だけを取り上げることは、グラムシの政治思想に対する評価としては一面的であることは以上より確認できよう。それでは狭義のグラムシ研究という範疇にとどまらず、「ピオス」と「ゾーエ



一」という冒頭の問題意識からして彼の議論にいかなる含意を認めるべきだろうか。

まず確認すべきは、グラムシが人間の生それ自体を全面的に歴史的形作物と見なすことによって、労働に定位しつつ文化を語り、それを「市民社会」における政治的実践へとつながる回路を見いだしたということである。ここでは、労働のような領域もピオスに深く嵌入している。むしろ彼においては、とりわけ生産労働を通じて行使される規律化によってこそ、統一的で秩序だった「人格」が形成されるのである。そのようにして、「従属階級」が「市民社会」における対抗的「ヘゲモニー」を担うことが可能になる。かかる意味において、工場は未来社会の萌芽であり、「ヘゲモニーは工場より発する」。逆にそのような契機を欠いた人間の「人格」は、統一性を欠いた「奇怪な混合物」でしかない。

ここで問題になっているのは、端的に言えばフォーコー的な「個体化」ないし「主体化」の論理である。すなわち文化やコミュニケーションを可能にする言語的存在としての人間、ピオスの次元を生きる人間が、生をめぐる権力作用によっていかにして作り上げられるのか、という問題である。そしてすでに見たように、グラムシがその根底と考えたのがフォーディズム的生产様式であった。

このようなフォーディズムに依拠した「個体化」のモデルが、高度に20世紀的な時代性を帯びていることは明らかである。ポスト産業化・ポストフォーディズムと言われる現在の産業形態の第一の特徴は、その高い流動性である。このような流動性は、社会分業の一分枝として「標準化」され固定化される過程を「人格」形成と見なすグラムシのモデルとは明らかに相容れないだろう。またしばしば指摘されるように、ポストフォーディズム下における労働は、自然との循環や物質との交渉というよりもむしろ、象徴や感情を媒介とした人間同士のコミュニケーションという側面をますます強めている<sup>14</sup>。アレントは労働とコミュニケーションとを截然と分けたが、時代はむしろ彼女の認識とは逆の趨勢へと進んでいる。

現代のイタリアの政治思想家は、このような労働様式の変容が言語的存在としての人間にもたらす影響についてとりわけ敏感に反応している。一例を挙げるとすれば、A・ネグリは、規律化によって特徴付けられる近代社会と現代のポストフォーディズム的「管理社会」とを対比しつつ、「個体化」（彼の用語では「主体化」）の変容について以下のように述べている。

近代の諸制度によって生産される主体性——在監者、母親、労働者、学生などといった——は、大工場で生産される標準化された機械の部品に似ていた。……けれどもある時点で、こうした標準化された部品、制度によって生産されたアイデンティティの固定性は、さらなる可動性や柔軟性へと向かう流れに対する足かせとなった。管理社会への移行に伴って生産される主体性は、アイデンティティにおいて固定されたものではなく、異種混交的で、変調する主体性なのである（Negri, Hardt [2000 : 331 = 2003 : 419]）

▶14 たとえば、本田 [2005]、Marazzi [1999 = 2009] 等を参照。

ここで着目すべきは彼の問いの立て方である。すなわち、異種混交性をもたらす創造性や豊かさといった契機を強く称揚する点で、雑多な「主体性」としての「マルチチュード」論はグラムシとまったく対照的であるもの、生をめぐる権力作用から言語的存在としての「主体性」の生産を捉え直すという問題意識自体は両者に明らかに共通のものである。

その意味で、グラムシのモデル自体は時代性を免れないにせよ、彼の立てた問題自体は未だ乗り越えられていない。人間を単なる動物的生から分かつのは言語的次元であるとしばしば語られる。だがそうだとすれば、その生をめぐるなされる様々の権力作用は、人間をいかなる言語的存在として「個体化」するのか。言い換えれば、生をめぐる現在なされている種々の問題は、いかなる（新たな）かたちのコミュニケーションと公共性を可能にするのか。これらの問題は、文化やコミュニケーションをめぐる政治学的思考にとって一つの重要な課題となると思われる。

## 参考文献

- Agamben, Giorgio (1995) *Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita*, Torino: Einaudi. = (2003) 高桑和巳 (訳) 『ホモ・サケル 主権権力とむき出しの生』 以文社.
- Arendt, Hannah (1958) *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press. = (1994) 志水速雄 (訳) 『人間の条件』 ちくま学芸文庫.
- Badaloni, Nicola (1975) *Il Marxismo di Gramsci*, Torino: Einaudi.
- Bellamy, Richard (1987) *Modern Italian Social Theory: Ideology and Politics from Pareto to the present*, Cambridge: Polity Press.
- Bobbio, Norberto (1986) *Profilo ideologico del Novecento*, Torino: Einaudi. = (1993) 馬場・押場 (訳) 『イタリア・イデオロギー』 未来社.
- Buci-Glucksmann, Christine (1975) *Gramsci et L'État: pour une théorie matérialiste de la philosophie*, Paris: Fayard. = (1983) 大津真作 (訳) 『グラムシと国家』 合同出版.
- Charzat, Michel (1977) *Georges Sorel et la révolution au XX<sup>e</sup> siècle*, Paris: Hachette.
- Durkheim, Émile (1897) *Le suicide: étude de sociologie*, Paris: Alcan. = (1985) 宮島喬 (訳) 『自殺論』 中公文庫.
- Foucault, Michel (1976) *La volonté de savoir*, Paris: Gallimard. = (1986) 渡辺守章 (訳) 『性の歴史 I 知への意志』 新潮社.
- Gramsci, Antonio (1955) *L'Ordine nuovo, 1919-1920*, 2<sup>a</sup> edizione, Torino: Einaudi.
- , (1977) *Quaderni del carcere*, a cura di Valentino Gerratana, Torino: Einaudi.
- Marazzi, Christian (1999) *Il posto dei calzini: La svolta linguistica dell'economia e i suoi effetti sulla politica*, Torino: Bollati Boringhieri. = (2009) 多賀健太郎 (訳) 『現代経済の大転換 コミュニケーションが仕事になるとき』 青土社.
- Marx, Karl, Engels, Friedrich (1932) *Werke und Schriften: von Mai 1846 bis März 1848*, Marx-Engels Gesamtausgabe; Abt. 1, Bd. 6, Berlin: Marx-Engels-Verlag. = (1971) 大内・向坂 (訳) 『共産党宣言』 岩波文庫.
- Mitchell, Donald (2000) *Cultural Geography, A Critical Introduction*, Oxford: Blackwell.
- Negri, Antonio, Hardt, Micheal (2000) *Empire*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. = (2003) 水嶋ほか (訳) 『〈帝国〉 グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』 以文社.
- Rosanvallon, Pierre (1976) *L'âge de l'autogestion: ou la politique au poste de commandement*, Paris: Seuil. = (1982) 新田・田中 (訳) 『自主管理の時代』 新地書房.
- Spriano, Paolo (1964) *L'occupazione delle fabbriche. Settembre 1920*, Torino: Einaudi. = (1979)

桐生尚武（訳）『工場占拠 イタリア1920』鹿砦社.

Trentin, Bruno (1997) *La città del lavoro: Sinistra e crisi del fordismo*, Milano: Feltrinelli.

Wolin, Sheldon (1961) *Politics and Vision: continuity and innovation in Western political thought*, London: G. Allen & Unwin, 1961. = (1975-1983) 尾形ほか（訳）『西欧政治思想史』福村出版.

市野川容孝（2006）『社会』岩波書店.

上村忠男（2005）『グラムシ 獄舎の思想』青土社.

———（2008）「ちくま文庫版解説」、グラムシ、上村（編訳）『新編 現代の君主』ちくま学芸文庫.

姜玉楚（1995）『グラムシ思想における南部問題の位置』東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士論文.

佐藤正則（2000）『ポリシェヴィズムと〈新しい人間〉』水声社.

島弘（1979）『科学的管理法の研究〔増補版〕』有斐閣ブックス.

杉田敦（1998）『権力の系譜学 フーコー以後の政治理論に向けて』岩波書店.

田中拓道（2006）『貧困と共和国 社会的連帯の誕生』人文書院.

中岡哲郎（1970）『人間と労働の未来 技術進歩は何をもたらすか』中公新書.

———（1971）『工場の哲学 組織と人間』平凡社選書.

本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会：ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版.

（2009年4月14日受理、2009年6月1日最終原稿受理）